

Welcome to the Ushuku Shell Mound

Amami Oshima. Near the coral-rich waters of Amami lies an ancient site from the Jomon period. The Ushuku Shell Mound. They have revealed shellfish and marine remains, as well as the ruins of a stone-pit structure, clay vessels, and bone and horn tools. The Jomon period lasted for over ten thousand years. Humans and nature existed in harmony as one. From this deep connection, the Amami Jomon way of life was formed. The Jomon people of Amami settled in pit dwellings. They hunted, gathered, and fished, thriving in balance with the natural world. Amami's story is unique. It never experienced the Yayoi period, which brought rice cultivation to mainland Japan. Why? Because Amami's lands were abundant, overflowing with nature's blessings. There was no need to transition to agriculture. As a result, the Amami Jomon way of life continued for centuries, lasting until the Middle Ages. A society in harmony with nature. A vision of sustainability. These are the Amami Jomon SDGs. The Ushuku Shell Mound holds the key to a sustainable way of life. If you seek the secrets of the Jomon and SDGs, come to the Ushuku Shell Mound in Amami Oshima.

奄美縄文 SDGs ガイドブック —Amami Jomon SDGs Guidebook—

【総監修・文】谷中 修吾 (BBT 大学大学院 経営学研究科 教授 / 奄美市政策アドバイザー)

【企画・運営】中江 康仁 (奄美市プロジェクト推進課)、小林 千香子 (奄美市プロジェクト推進課)

【時代考証】喜友名 正弥 (奄美市教育委員会文化財課)、川上 晃生 (奄美市教育委員会文化財課)

【協力】宇宿貝塚史跡公園リニューアルによる SDGs 加速化事業検討委員会

※奄美縄文 SDGs ガイドブックは、令和 6 年度 宇宿貝塚史跡公園リニューアルによる SDGs 加速化事業の一環として制作されました



The Ushuku Shell Mound

AMAMI JOMON SDGs GUIDEBOOK

奄美縄文 SDGs ガイドブック



01

奄美縄文の 時代区分



奄美の自然共生の源流は、縄文時代にある

奄美の時代区分における縄文時代



圧倒的にサステイナブルな自然共生社会

奄美の歴史年表を見ると、1万年以上にわたって継承された縄文時代に目が留まります。奄美縄文の人々は、竪穴建物に定住し、漁労・狩猟・採集によって食料調達を行いながら自然と共生していました。

また、奄美の時代区分についても、特筆すべき点があります。日本本土とは異なって、奄美には縄文時代に続く弥生時代を特徴づける文化が存在しません。亜熱帯気候の環境下で自然の恵みが極めて豊かであったため、奄美では画一的な水稻栽培（コメづくり）を導入する必要がなかったのです。その結果、中世に至るまで、自然共生に基づく漁労・

狩猟・採集が継続されました。

日本全国を見渡しても、これほど長期で自然共生の歴史を持つ地域は希少です。奄美縄文には、サステナビリティの知恵が凝縮されています。



縄文時代から自然の恵みが豊かな奄美大島

02

奄美縄文の 理念体系



縄文の思想哲学に基づく行動様式が、
奄美の暮らしをつくった

思想哲学

人と自然は二つで一つ(自然共生)

Humans and Nature Exist in Harmony as One

行動様式



▼資源調達のあり方
自然の恵みを享受して、
満遍なく取り入れる



▼周囲との関係性
自然の恵みを共有し、
相互に助け合う



▼生産の基本姿勢
自然の恵みを活用して、
自由に価値を創造する



▼機会に対する基本姿勢
自然の恵みに感謝し、
必要な分だけ頂戴する

暮らし

土地・住居

食料調達

調理・貯蔵

製品づくり

交流・交易

and more...

03

奄美縄文の暮らし①

土地・住居



海や河川の近くに石組の竪穴建物を建てて定住生活をしていた

笠利半島の東海岸は人気の定住スポットだった

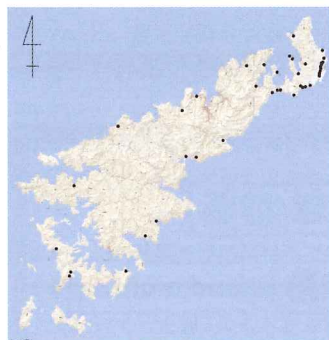
縄文時代には、日本全国で、狩猟・採集・漁労を営む定住生活が始まりました。奄美では、笠利半島の東海岸に位置する標高 10m 程度の砂丘地の上で、縄文時代晩期の定住跡が確認されています。

近くの海には豊富な魚貝類の棲家となるサンゴ礁が形成されており、海からの食料調達に適した環境であったと言えます。また、川に生息する貝類を食べた後の貝殻や、川の下流域に堆積する石を材料とした石製品なども出土していることから、河川にも近い環境であったことが分かります。この河川は、飲料水の確保や身を清めるための水場としても活用されていたことでしょう。

奄美の竪穴建物は石組でできている

縄文時代の基本的な住居「竪穴建物」です。平均的に、直径 3～4m の円形または一辺 3～4m の方形に地面が掘り窪められ、20 m²程度の敷地に 4～5 人が住んでいたと考えられています。建物は数本の支柱で構成され、屋根には草木などが葺かれます。また、建物の中に石囲い炉が設けられることも一般的です。

奄美でも数基の竪穴建物跡が見つかっています。その特徴は、建物の基礎が「石組」であることです。この石は、全体的に丸みを帯びており、近くの川や海岸から運ばれていたと考えられます。この石組の竪穴建物は、奄美を北限として、南は沖縄諸島まで確認されています。



奄美における縄文遺跡の分布



石組の竪穴建物跡(宇宿貝塚)



復元された石組竪穴建物(ウツタ川遺跡)
提供: 奄美市教育委員会

行動様式

- 自然の恵みを享受して、満遍なく取り入れる
- 自然の恵みを共有して、相互に助け合う
- 自然の恵みを活用して、自由に価値を創造する
- 自然の恵みに感謝して、必要な分だけ頂戴する

暮らし

- 資源が豊富な海や河川の近くに定住した
- 結いの精神とともに複数の家族で集落を形成した
- 地域資源を集めて居住環境に適応した石組の竪穴建物を作った
- 中長期的に持続可能な定住生活を営んだ

04

奄美縄文の暮らし②

食料調達



サンゴ礁の恩恵を受けて漁労を盛んに営み、狩猟や採集を組み合わせていた

海の幸と山の幸で豊かな食生活に恵まれた

縄文時代における食料調達の生業は、一般的に「狩猟・採集・漁労」です。狩猟では罠などを用いて獣類を捕り、採集では木の実や山菜を採り、漁労では海や川で魚介類を捕獲します。奄美では、特に漁労が盛んに営まれたことから、食料調達の中でも漁労を強調して「漁労・狩猟・採集」と表現できるでしょう。

宇宿貝塚をはじめとする奄美の縄文遺跡では、数多くの魚貝類とともに、ウミガメ、クジラ、サメなど大型海獣類の骨も出土しています。また、リュウキュウイノシシの骨、椎の実などの堅果類も確認されており、海の幸と山の幸に恵まれた奄美縄文の食生活が窺えます。

奄美縄文は国内屈指の漁労パラダイスだった

サンゴ礁の恩恵を受けて魚貝類が豊富だった奄美縄文では、漁労活動が盛んに行われていたことが特徴的です。食した魚貝類の骨や殻によって形成された宇宿貝塚は、その事実を雄弁に物語っています。

漁労活動の道具としては、網の^{おもり}と考えられる貝製品(貝^{かいすい})が出土しています。タカラガイや二枚貝に孔を開け、紐を通して網を作り、複数の人々が協力して追い込み漁をしていたと考えられます。これは、現代の奄美でも一部の地域で行われている漁獲法です。

また、遺跡から出土する魚貝類は、現代の奄美にも生息していることから、乱獲されず必要な分だけ獲っていたと推察されます。



宇宿貝塚で出土した魚貝類



大瀬海岸のサンゴ礁で採れる貝類



追い込み漁によって獲れる魚

行動様式

- 自然の恵みを享受して、満遍なく取り入れる
- 自然の恵みを共有して、相互に助け合う
- 自然の恵みを活用して、自由に価値を創造する
- 自然の恵みに感謝して、必要な分だけ頂戴する

暮らし

- 豊かな海の幸のみならず、山の幸も得た
- 結いの精神とともに、皆で協力しながら食料を調達・分配した
- 骨や貝を材料として、狩猟や漁労に使う製品を作った
- 食料を乱獲することなく、自然の命を循環させた

05

奄美縄文の
暮らし③

調理・貯蔵



骨や貝殻で文様を刻んだ土器を作って、
食料の調理や貯蔵を行っていた

縄文土器は調理・貯蔵に
イノベーションをもたらした

縄文時代には、土器の発明によって、食料の煮炊きができるようになりました。縄文土器に付着したスヤコゲ、各種の食物依存体などから、土器が実際に調理に使われていたことが分かっています。そのままでは食べられない食材も、土器で煮込むことで食べられるようになるなど、土器の発明は重大なイノベーションであったと言えます。

奄美でも、様々な縄文土器が出土しています。宇宿貝塚周辺では、宇宿下層式土器や宇宿上層式土器などが代表的です。これらの形状は深鉢形で、現在の鍋の役割を果たしていたと考えられます。また、宇宿上層式土器が使用された時期から新たに壺形も加わっており、土器が食料貯蔵にも活用されていたと見られます。

奄美の縄文土器は骨・貝殻・
爪・竹で文様が刻まれている

日本全国で出土している縄文土器には、様々な文様が施されています。縄文という名の由来となった縄目の文様は広く知られていますが、粘土紐を貼り付けて上から刺突を加えた文様、棒の先で連続的に刺した文様、二枚貝の縁辺部を当て付けた文様など、時代や地域によって様々な文様が見られます。

奄美の縄文土器には、本州に多い縄目の文様は見られず、骨、貝殻、爪、竹などを使って文様が刻まれていることが大きな特徴です。とりわけ、土器に文様を施す工具としての獣骨・魚骨、貝殻は、漁労・狩猟・採集で獲得した獣類や魚貝類を調理した後に残った材料をそのまま利用した可能性があります。



深鉢形の土器
【宇宿貝塚出土】



壺形の土器
【宇宿小学校道路出土】



様々な土器の文様

行動様式

- 自然の恵みを享受して、
満遍なく取り入れる
- 自然の恵みを共有して、
相互に助け合う
- 自然の恵みを活用して、
自由に価値を創造する
- 自然の恵みに感謝して、
必要な分だけ頂戴する

暮らし

- 土器で多種多様な
食料を調理した
- 皆で協力しながら
土器を製作した
- 骨や貝殻などで土器に
独自の文様を施した
- 必要十分な食料を
土器で貯蔵した

06

奄美縄文の
暮らし④

製品づくり



貝製品、骨製品、石製品を作って、
暮らしの中で活用していた

自然の恵みを材料として
生活に必要な道具を生み出した

縄文時代には、全国各地で、土製品、石製品、木製品、骨製品、貝製品など、様々な製品（道具）が生み出されました。

奄美では、特に、貝製品、骨製品、石製品の出土が多く見られます。豊富な魚貝類や身近にある石が、製品の材料として活用されました。

縄文時代の製品例

- 【土製品】土器、耳飾り、土偶、棒状土製品、土製円盤、異形土製品
- 【石製品】石鏃、石匙、石斧、石皿、磨石、敲石、石棒、玉、垂飾、耳飾り
- 【木製品】弓、皿、漆器、建物の柱、丸木舟、櫓、櫓、杓子
- 【骨製品】釣針、銚、骨鏃、縫針、骨斧、垂飾、髪針、腕輪、腰飾
- 【貝製品】貝輪、垂飾、髪針、腕輪、腰飾、皿、貝匙、貝斧、敲打器、煮沸器



宇宿貝塚で出土した様々な貝製品・骨製品・石製品



オオツタノハから
製作された腕輪

奄美で馴染みのある
生き物たちから製品が生まれた

奄美縄文の製品は、現在の奄美でも馴染みのある生き物から得られた材料が活用されています。形状や材質、特性を見極め、それぞれに適した道具が生み出されました。

代表的な貝製品としては、「オオツタノハ」「サラサバテイ」「メンガイ」の貝殻から製作された貝輪や、「ホラガイ」から製作された湯沸かし器などが挙げられます。貝製品の多くは、腕輪や垂飾などの装飾品、食膳具などに活用されていたと推察されます。

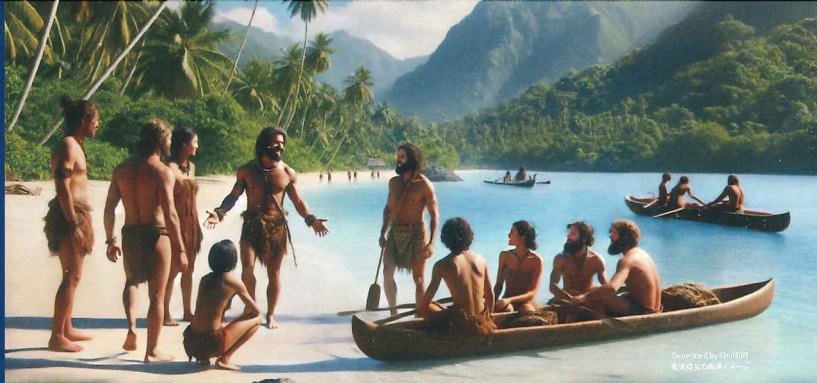
また骨製品では、「リュウキュウイノシシ」の骨から製作された腕輪や垂飾などが発見されており、その多くは装飾品として活用されていたと考えられています。

行動様式

- 自然の恵みを享受して、
満遍なく取り入れる
- 自然の恵みを共有して、
相互に助け合う
- 自然の恵みを活用して、
自由に価値を創造する
- 自然の恵みに感謝して、
必要な分だけ頂戴する

暮らし

- 魚貝類など身近な
資源すべてを製品の
材料とした
- 皆で協力しながら
必要な製品を製作した
- 材料の特性を活かして
多様な製品を生み出した
- 調理後の残骸等を製品の
材料として活用した



九州や沖縄と関係性を築いて、 継続的に交流・交易をしていた

奄美と九州・沖縄は 縄文時代からパートナーだった

縄文時代の遺跡を調査すると、暖かい南の海でしか採れない数種類の貝が九州・本州・北海道で見つかったり、九州の黒曜石（腰岳産）や新潟のヒスイ（糸魚川産）が琉球列島で見つかったりしています。これらの事例から、縄文時代に全国規模で人々の活発な交流や地域特産品を介した交易が行われていた様子が窺えます。

奄美では、縄文時代の遺跡からの出土品（貝、土器、黒曜石、ヒスイなど）に基づいて、九州・沖縄との交流・交易が活発に行われていたことが分かっています。当時の人々は、丸木舟で島々を移動しながら、九州や沖縄を往来していたと考えられています。



交流・交易の品となった
奄美のオオツタノハ



九州・沖縄から奄美に
持ち込まれた土器や黒曜石

交流・交易の品として 奄美の貝類が重宝された

縄文時代に、奄美からの交流・交易の品として重宝されたのは貝類です。九州以北では、奄美近海で採れる「オオツタノハ」などが素材貝として出土するとともに、加工途中に生じた破片も出土しています。

一方で、縄文時代の中期より、奄美には九州や沖縄諸島から土器が持ち込まれました。また、縄文時代の後期から晩期、弥生時代の初頭にかけては、良質な腰岳産の黒曜石や新潟の糸魚川産のヒスイが持ち込まれたことも確認されています。

このように奄美産の貝類を介した交流・交易は、平安時代頃まで続くこととなります。

行動様式

- 自然の恵みを享受して、満遍なく取り入れる
- 自然の恵みを共有して、相互に助け合う
- 自然の恵みを活用して、自由に価値を創造する
- 自然の恵みに感謝して、必要な分だけ頂戴する

暮らし

- 九州・沖縄からの流入品を取り入れた
- 九州・沖縄と協同関係を築いて交流・交易をした
- 流入品に基づいて新たな製品を生み出した
- 持続可能な範囲で地域資源を交易に活用した



縄文の思想哲学に基づく行動様式が、 サステナブルな暮らしをつくる

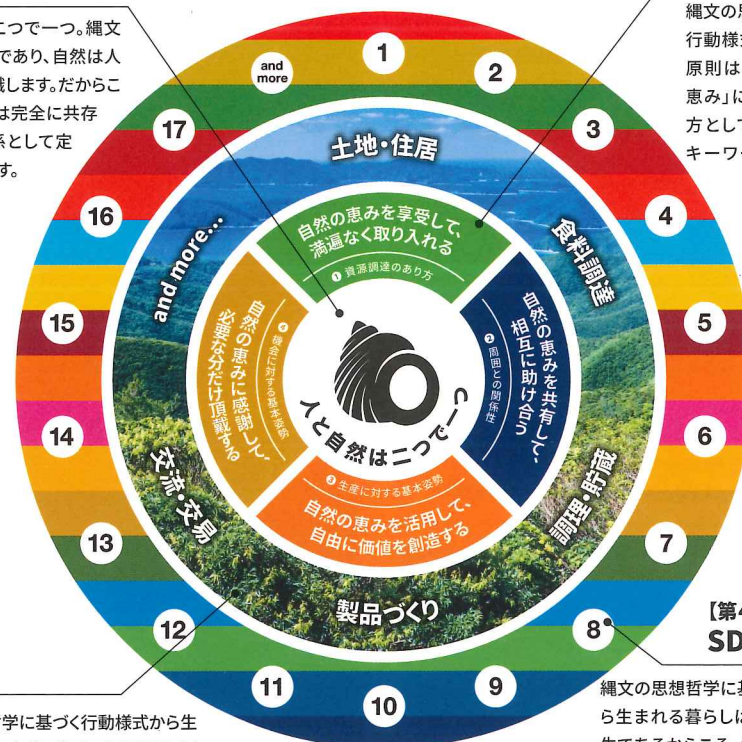
【第1層】 思想哲学

人と自然は二つで一つ。縄文は「人は自然であり、自然は人である」と認識します。だからこそ、人と自然は完全に共生共生する関係として定義されるのです。

縄文型SDGsの4層モデル

【第2層】 行動様式

縄文の思想哲学に基づく行動様式としての4つの原則は、すべて「自然の恵み」に対する人のあり方として定義されます。キーワードは、直感、協調、創造、感謝。



【第3層】 暮らし

縄文の思想哲学に基づく行動様式から生まれる暮らし。土地・住居、食料調達、調理・貯蔵、製品づくり、交流・交易など、あらゆる暮らしの根源は自然共生です。

【第4層】 SDGs目標群

縄文の思想哲学に基づく行動様式から生まれる暮らしは、完全に自然共生であるからこそ、必然的にSDGsを達成します。17個の目標のみならず、追加目標も必達です。



ビジネスのあり方に「縄文型」を取り入れる

現代ビジネスの主流である管理型経営の源流は、日本本土で縄文時代の次にくる弥生時代にあります。

食料調達手段としての稲作に人的リソースを集中投下し、利益の最大化を求める「弥生型ビジネス」は、資本主義経済のもと際限なく利益を求め続け、地球環境に大きな負荷をかけ続けています。

地球が存続するためには、環境負荷をかける企

業活動に対してブレーキが必要です。その処方箋が「SDGs」。本質的には、ビジネスのあり方そのものを問う必要があります。

だからこそ、人と自然が共存共生する「縄文型ビジネス」への着目が、大きな意味を持つのです。奄美が未来をつくる時代へ。

縄文型ビジネス

企業が地球と共存共生することに最適化したビジネス



【ビジネス原理】 直観的

ビジネスモデルをもって直観的に動く



【ステークホルダーとの関係性】 協調的

すべてのステークホルダーと協業する



【業務に対する基本姿勢】 フリーダム

既存観念にとらわれず新しい価値を創造する



【商談に対する基本姿勢】 感謝オリエンテッド

ご縁とともにビジネスを紡ぐ

弥生型ビジネス

企業が利益の最大化を求めることに最適化したビジネス



【ビジネス原理】 計画的

ビジネスプランをもって計画的に動く



【ステークホルダーとの関係性】 競争的

競合他社との差別化で比較優位を築く



【業務に対する基本姿勢】 コンプライアンス

ルールに従って正確に業務を遂行する



【商談に対する基本姿勢】 期待オリエンテッド

投資に見合うリターンを回収する



宇宿貝塚周辺にも多くの縄文が息づいている



奄美市歴史民俗資料館 ★

宇宿貝塚史跡公園

宇宿高又遺跡 ●
宇宿小学校遺跡 ●

万屋グスク遺跡 ● 宇宿漁港 ●

万屋下山田遺跡 ● 奄美空港 ●
万屋ケジ遺跡 ●



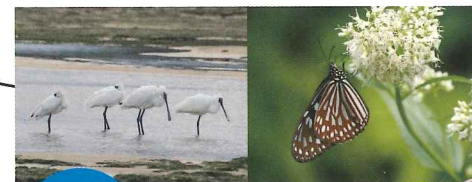
ともし
土盛
海岸

「青い海」と「白い砂浜」。現代では、奄美観光の人気スポット。奄美縄文の人々に自然の恵みをもたらした海を感じながら歩いてほしい。



きしかわ
喜子川
遺跡

約7,300年前のアカホヤ火山灰層の上から、縄文時代前期の爪形文土器が出土しました。足元に眠る土器を想像しながらドキドキしてほしい。



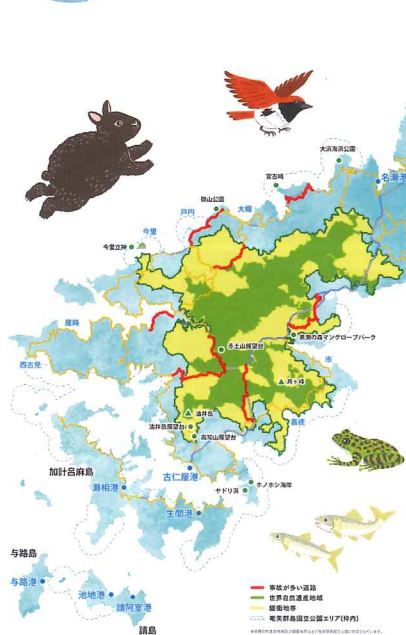
おおせ
大瀬
海岸

奄美を代表する野鳥スポット。冬の風物詩でもあるリュウキュウアサギマダラの越冬も見られます。縄文から続く生物多様性を感じてほしい。

縄文から現代に引き継がれる
奄美の大自然を体感する

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録

2021年7月26日：ユネスコ世界遺産委員会において世界遺産への登録が決定



世界自然遺産としての普遍的価値

島の成り立ちを反映した独自の生物進化を背景とした、国際的にも希少な固有種に代表される生物多様性保全上重要な地域



イシカワガエル



アマミノクロウサギ



ルリカケス



アマミセイシカ

奄美大島世界遺産センター Amami-Oshima World Heritage Conservation Center

奄美大島の森と生き物を実際にフィールドを歩いているように体感することができる再現フィールドや、奄美大島の自然を守るための取組やルールに関する展示コーナーがあります。

縄文のスイッチを ON にして、
サステナブルな奄美の未来をつくるAMAMI FUTURE
DEVELOPMENT GOALS

奄美の未来をつくる「Amami Future Development Goals」

奄美市SDGs推進プラットフォームでは、ワークショップで協議を重ねながら、奄美版SDGsとして、「Amami Future Development Goals」を制定しました。SDGsで掲げられる17の目標について、島の人が親しみを持ってイメージしやすいように「奄美らしい表現」に置き換え、新たに3つの目標を独自に加えています。



鹿児島県の奄美大島。

豊かなサンゴ礁が広がる海の近くに、縄文時代の遺跡があります。

宇宿貝塚。

貝塚の名の通り、縄文時代の魚貝類が出土するとともに、
竪穴建物跡、土器、石器、骨角器などが発掘されました。

縄文時代は、1万年以上にわたって続いた時代。

人と自然は二つで一つ。

そこから生まれたのが、奄美縄文の暮らしです。

奄美縄文の人々は、竪穴建物に定住し、

漁労・狩猟・採集によって食料調達を行いながら、

自然と共生して暮らしていました。

奄美には、縄文時代に続く弥生時代がありません。

自然の恵みに溢れていて、農耕生活に移行する必要がなかったのです。

自然共生に基づく奄美縄文の暮らしは、中世に至るまで継続されました。

人と自然が共生するサステナビリティ。

それが、奄美縄文SDGs。

宇宿貝塚には、サステナブルな暮らしのヒントが詰まっています。

縄文とSDGsの秘密を知るなら、奄美の宇宿貝塚へ。



宇宿貝塚史跡公園

— 国指定史跡「宇宿貝塚」遺構展示公開施設 —

宇宿貝塚史跡公園は、昭和8年(1933)に発見され、奄美群島において初めて本格的な発掘調査が行われた国指定史跡「宇宿貝塚」を整備した公園である。平成2年(1990)から平成15年(2003)までの14年間の史跡整備を経て、平成16年(2004)2月9日に開園した。

公園は、当時の海岸砂丘地形を復元した広場と発掘調査で見つかった遺構などを展示する史跡保護覆屋施設で構成されている。施設内では、縄文時代の石組竪穴建物跡や中世のV字の溝状遺構、土坑墓、そして、各時代の生活面を調査当時のまま保存、公開している。

- 住 所 鹿児島県奄美市笠利町大字宇宿字大籠 2301
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休 館 日 月曜日・祝祭日の翌日・12月28日～1月4日
- アクセス 奄美空港より車で5分 / 徒歩30分
名瀬市街地より車でおよそ50分
「宇宿バス局前」停留所より徒歩5分
奄美市歴史民俗資料館より車で5分 / 徒歩30分

